



特集 東アジアの人権問題

いのちの鍋叩き～ミャンマーキリスト者たちの確信を受けて～

渡邊さゆり (マイノリティ宣教センター共同主事)

1. クーデター後の状況

2021年2月1日未明、ミャンマー ビルマ (以下、ミャンマー) において、軍事クーデターが起こった。即座にミャンマー国軍総司令官ミンアウンフラインが全権掌握したことが発

表され、終日、愛国心を称揚する音楽が放映された。非常事態宣言、戒厳令、夜間外出禁止令が出された。

市民は国軍に抗議の意を表し、「鍋叩き」(その後3ヶ月以上にわたり毎晩行われ続けた)を

続行、昼夜を問わず屋外に繰り出した。全土100万人以上の抗議デモが連日行われた。人びとは、歩き、座り、鍋を叩く。スマートフォンで撮影された軍の暴力行為が、SNSを通じて世界に発信されている。国軍の攻撃はエスカレートし、容赦ないものとなった。2月下旬には、実弾射撃が市民に向けてなされ死者が急増した。少数民族地域に対しては、無差別空爆が続く。学校、病院、公共施設は占拠され、瞬間に死と隣り合わせの日々が市民を襲った。銀行からの現金引き出しは制御され、国境警備は出国を試みる人々を捕らえ、刑務所へ送る。メディアは報道認可を剥奪され、毎晩、見せしめに逮捕者がテレビで晒される。新聞には毎日指名手配者の名前が列記される。毎日傷だらけにされた市民の写真、国内避難民の悲壮な画像が送られてくる。国軍の暴力は止んでいない。後方支援者がいるからだ。国際社会が国軍との交流を断たず、自国の利益保持のために「待ち」^{なだ}「宥め」の手法をとる間に、一体、何人の市民が殺されてきたことか。

2. CDMによる抵抗

抵抗者の死傷者は7月中旬で920人以上となった。市民は、2月当初からCDM (Civil Disobedience Movement) 市民不服従運動を始めた。まず看護師が立ち上がり、続いて医師、学校教育従事者、鉄道員、銀行員など、市民はCDM参加を表明した。軍事力の下での職務拒否がCDMである。CDM参加者は、国家反逆者と呼ばれ、給料差し止め、解雇の危機に瀕した。CDMは現在も継続されている。在日ミャンマー大使館の職員2人（さらに1人は嘱託職員で名前を出しておらず報道されていない）も、CDMを表明、外交官職を国軍から剥奪された。日本政府はCDM外交官のミャンマー送還をしないと明言するも、国軍側から彼らに代わる外交官ビザ要請がある場合、どう対応するかは未だ明らかにしていない。CDM外交官は、在日ミャンマー人と日本の支援者のサポートを受け、日本政府へ外交官ビザ復活を求めている。

CDMは、民衆による平和的民主化を求める行動である。しかし内実は自らの生活をかけた激しい内的闘争でもある。新型コロナ感染拡大の中、医療従事者のCDMに、国内外からのバッシングが続く。しかし、彼女、彼らは、反逆者と目され命を狙われながら、街角で、自宅で、村や街で、無料診療を行い、医療器具や薬品の確保に奔走し、国軍からの暴行で傷つけられた人、基礎疾患があり常に看護が必要な人々や、新型コロナ感染者に対する手当を現在も続けている。

3. 国軍による壮絶な暴力

抗議行動に対する弾圧は強められた。国軍は抵抗運動リーダーを執拗に追いかけて、デモの情報を流す市民たちを連行、拘束した。6000人余りが拘束されたと報道されているが、その数は警察で「取調べ」を受け、刑務所へと移送された人数である。6月30日、国軍は2296人釈放と発表した。その中には政治家、公務員は含まれなかった。現在も2000人以上は拘束されたままであり、釈放当日、一方では4歳の幼児を逮捕し、同週、マンダレーでは抗議者の居住地を爆破し8人の死傷者、そしてそこにいた全員を逮捕、連行している。

治安部隊は、昼夜を問わず家屋に押し入り、鉄パイプで市民を殴打し続け、目当ての人物がいなければ、家族を代わりに連れ出し、ジープに押し込み、連れ去っている。取り調べ時に拷問が行われている。長時間の殴打、殺害をほのめかし、情報提供を迫る、飲食をさせず極限状態まで追い込むなどである。ある女性は、性的暴力を受けたと証言している。股間を蹴り飛ばされ、排尿障害により、苦しんだ。拷問で殺された人の遺体を、引き取りに来るようにと命令された家族が、有料で遺体を引き取ったという証言もある。

4月18日に逮捕、拘束された日本人ジャーナリスト北角裕樹さんは、5月14日に解放され帰国し、日本国内で体験を証言している。彼は政治犯が勾留されていたインsein刑務所の独房

に置かれた。彼は「中にまだいる人々のことを思うと先に釈放され、国外で活動できる自分の使命は大きい」と語る。ミャンマー国内で釈放された人が、拘束時の状況、拷問を公言することは家族や知人に危険が及ぶと脅され、口は重い。隠蔽された暴力が積み重なっているのである。明らかな人権侵害と暴力が行われているが、日本政府は延々と態度表明をせず、「独自パイプ」で仲介するという、曖昧なポーズを続けている。国軍に代わって樹立されたNUG（国民統一政府）を認証し始めた国際社会の動きからは、何十歩も後退しており、傍観的どころか経済活動の損失ばかりを気にし、市民の声を黙殺し、見殺しにしていると私には思えてならない。

4. ミャンマーにあるキリスト教会と何でつながるのか

ミャンマーキリスト教徒の多くは少数民族で、プロテスタントのバプテストが最大教派である。日本、イギリスからの独立後、少数民族はビルマ族優遇政策下で迫害を受け続け、ミャンマー国軍（元独立軍）と武力衝突を繰り返してきた。ミャンマー国軍は、常時、自国民を相手に戦う「内戦戦闘集団」で、抵抗する民衆を弾圧することに全く躊躇がない。

クーデター当初、ミャンマーバプテスト連盟は国軍に抗議を表明した。この声明発表は、国軍への反逆者と見なされることとなることを承知してのことである。各地の教会が襲撃を受け、牧師、信徒から多くの逮捕者が出た。抗議者への食糧支援をするキリスト教会、団体、私学もターゲットにされている。教会の扉は破壊され、窓は打ち破られ、パソコンから信徒情報は抜き出され、リーダーが連行されている。この状況で、ミャンマー国内に広がるキリスト教会は、都市部、遠隔地を問わず大きなダメージを受け、宗教活動が自由に行える状況ではなくなっている。このような厳しさの中、なお不屈に抗いを貫く動機は何であろうか。軍政下での人権蹂躪、自由な信仰表現、温かい交わりにより人が寄り添って生きていく素晴らしさを無化する力をこ

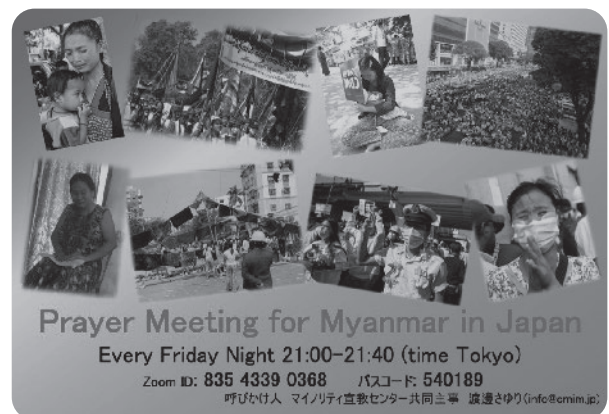
れまで散々に味合わされてきたミャンマーキリスト者たちは、魂の底からの祈り、平和実現を選び取る信仰的決断へと促されたとして私は受け止めている。これに、日本の宗教者がどう応えるのかが、今、問われている。

この決断に神が伴わないはずがないというミャンマーキリスト者らの神への確信を見た私は、深い祈りへと導かれた。私たちは、経済的パイプではなく、いのち、生活を支えるための弾力性のある帯で結ばれることができるのではないか。その帯とは、祈りである。私は、2月12日に、オンラインで祈り会を始めた。祈り会は、7月初めには21回目を迎え、毎週、100人近い参加者が祈る。毎週、私たちが、鍋を叩いている。今、ミャンマーでは鍋を叩くことすら反逆行為とされることへの抵抗として、そして平和実現のために諦めない意志を表明している仲間の志を、自分に引きつけ、鍋を叩く。いのちの鍋叩きへ、祈りへ、より多くの人が加えられていくことを願っている。

このように、ミャンマーの現状についての報告をする機会をいただき、ありがとうございました。「ミャンマーを覚える祈り会」は、毎週金曜日、午後9時～オンラインミーティング（zoom）で開いています。参加は申し込みなど不要で、当日直接こちらのミーティングに繋いでください。

ミーティングID：835 4339 0368

パスコード：540189



ミャンマーのカトリック教会

レオ・シューマカー（カトリック築地教会主任司祭 聖コロバン会）

ミャンマーに最初にキリスト教がもたらされたのは、13世紀に中東から来た商人たちからだという。当時、バガンは1000以上のパゴダが立ち並ぶ大都会であり、現在も世界三大仏教遺跡の一つに数えられている。しかし、ミャンマーのキリスト教の最古の歴史資料は、ポルトガル船がこの地域を探検していた1511年頃のものである。2014年、ミャンマーのカトリック教会は500周年を祝った。

元々は海岸沿いにあった小さなカトリックのコミュニティが、後に国王の命令でミャンマーの内陸部に移され、以来数百年間、フランシスコ会やイエズス会の宣教師によって信仰が守られてきた。これらのカトリック村は、今もミャンマー第2の都市マンダレー郊外に存在している。19世紀後半になると、パリ外国宣教会がミャンマーでの宣教を担当するようになり、ミラノ外国宣教会の助けを受けながら山岳部に住む少数民族に宣教地を拡げた。その後1世紀間で、カトリック教会は全国に拡がり、多くの修道会が学校や病院、社会福祉施設を開設した。特に、辺境地に病院や学校を作ったのは、カトリック教会の業績だ。

アジア太平洋戦争とそれに続く多くの内戦は、人々に苦しみをもたらし、軍部の影響力は増大した。1962年にクーデターで政権を奪取した軍部は、ミャンマーの社会や経済のあらゆる側面を支配するようになった。学校、病院、社会施設が国有化され、宣教師は追放され、礼拝以外の活動はすべて禁止された。かつてはアジアで最も裕福な国の一つであったミャンマーは、次第に最貧国の一つになっていった。教会は大きな圧力を受け、出版物はすべて検閲され、国内移動には警察への届けが必要となり、建物を建てることもできず、国際的な接触は基本的に禁止された。地元の教会は、軍が課す規則をどうかいくぐるかに頭を悩ませた。

2011年、ついに名目上の文民主導の政府が誕生し、2015年には民主的に選出された政府も誕生した。だが実際には、軍部は権力を放棄しておらず、自分たちの活動を決定する権利を有するなど、文民統制下でないことは明らかだった。それでも50年ぶりにカトリック教会が軍の干渉を受けずに機能し始め、教会や修道院、施設の再建だけでなく、コミュニティや社会活動も再開した。カトリック教会は少数民族社会において強い存在感を示し、診療所、寄宿舍、青少年プログラム、社会問題に対処するための活動など、地元の人々の様々なニーズに応えた。長い間、軍の抑圧に耐えた地元指導者たちは、教会の活動をとっても支持してくれた。

今、国は突然、1962年に戻ったかのようだ。軍は再び全権を握り、人々を苦しめている。大都市でのデモを弾圧すると、武装した民兵がレジスタンス活動を行う少数民族の地域にその関心を向けた。これらの地域で活動してきたカトリック教会は、監視され、軍の標的となった。教会の救急医療や避難所の提供をデモへの協力とみなされた。都市部でも危険にさらされ、カヤン州では爆弾や機関銃による攻撃を受けた。このような威嚇行為により、村全体が砂漠化し、州の人口の3分の1が国内避難民となっている。

カトリック教会はミャンマーで長い歴史を持ち、困難な時期に人々に希望と勇気を与えてきた。今回もカトリック教会は、命がけで人々の側に立っている。軍隊に逆らったシスターアンは言った。「わたしたちは民衆と苦しみを共にします。わたしたちは自らのミッションを捨てることはありません。それは傷ついた人を癒し、苦しめられている人を慰め、すべての命を守ることです」。

世界の関心がミャンマーを変える！

■ 西 千津（札幌教区信徒）

4月24日にミャンマー人による民主化支援デモが札幌でも計画されているという情報が突然届き、デモの前日に主催者と思われるミャンマー青年たちに初めて会うことになった。彼らが本当に居ても立ってもいられない必死の思いから2月に抗議集会を行い、その後も札幌駅前や狸小路でチラシを配るなどの抗議行動を続けていたことを知った。彼らの母国に対する熱い思いと、母国にいる家族や友人の安否を心配しながら、今、起こっていることに声を上げる勇気に触れ、彼らの声を多くの人に届けたいと思った。

大通公園にどんどん集まってくる彼らはとても若く、その多くが技能実習生だった。受入企業や管理団体は、彼らの思いを知っているのだろうか？ 今日ここに集まっているのは許可を得ているのだろうか？ そんな心配は無用だった。彼らは、何が起ころうとも母国の現状を伝える覚悟で来ていたのだ。コロナ禍で、しかも緊急事態宣言下でデモをすることに対し、異を唱える人がいるのも彼らは十分わかっている。しかし、今、この時に家族や友人が被害にあうかもしれないのだ。集まった人の中には、両親が拘束された人、17歳の弟や大切な叔父を失った人もいた。悲しみと怒りと不安と希望…複雑な気持ちで毎日を過ごしている。黙ってはいられないのだ。北海道にいる彼らの活動が日本にいるミャンマー人だけではなく、世界にいるミャンマー人と繋がっていることに驚いた。世界の関心がミャンマーを変える！ そんな彼らの思いに私は心が熱くなった。

ミャンマーでクーデターが発生し、一番初めに頭に浮かんだのは、契約期間を終えて、帰国できない技能実習生と卒業しても帰国できない留学生の今後だった。日本政府は、彼らの背景を考慮することなく、在日ミャンマー人に対し



札幌大通公園のデモにて デモの警備に来た警察の方にも検温・消毒をお願いしているミャンマー人の若者たち

では緊急避難措置としてコロナ禍で帰国できない人と同様に期限付きの在留を認める対応を発表した。「本国情勢が改善しない場合は更新可」として、長期の滞在を認めず、いつか帰ることを求めている。ミャンマー国軍が国を支配し続ける中、日本で抗議行動を行った人が、帰国後にどのような扱いを受けるかなどは全く考えていない。サッカーの試合でミャンマー国軍への抗議を示し、難民申請をした選手は今後どうなるのか？ 難民認定率が低く、国際基準に沿った人権意識が確立されているとは言えない日本で、本当に彼らは守られるのだろうか？

技能実習生は、今や北海道の基幹産業には欠かせない存在である。そこで、彼らと打合せを重ね、北海道知事への要請という形で彼らの思いを伝えることにした。日本政府に対する働きかけと共に、北海道に住んでいるミャンマー人に対する理解と配慮を求めた。残念ながら、一部議員から「国際問題は地方議会に馴染まない」と議会での決議とはならなかったが、他の国で起こっていることではなく、今、共に生活している隣人への関心が日本社会を、そして、世界を変えると信じたい。

香港国家安全維持法下におけるキリスト教

まつたによすけ
松谷暉介 (金城学院大学宗教主事・准教授 日本基督教団牧師)

はじめに

2021年6月、香港の民主派寄りの大手新聞「リング日報」が廃刊に追い込まれたニュースは、日本でも大きく報じられました。昨年6月30日に「香港国家安全維持法」(以下、国安法)が可決・施行されて以降、香港では報道の自由をはじめとする言論の自由が、大きく脅かされています。多くの民主活動家が逮捕・起訴され、中には海外亡命を余儀なくされた活動家もいます。一般市民の間でも、イギリスをはじめとする海外への移民の流れが止まりません。

そもそも香港の民主化運動とは何だったのでしょうか。またその中でキリスト教はどのような位置にあり、今後、香港のキリスト教はどのようなになっていくのでしょうか。

香港の民主化運動

イギリス植民地時代の香港には、長らく民主的な選挙制度がありませんでしたが、植民地政府は1980年代から部分的な民主制度を導入し始めます。しかし、こうした動きを中国政府が牽制したこともあり、民主的制度が整わないまま97年の返還を迎えます。中国に返還されて以降、香港にはミニ憲法と呼ばれる「香港基本法」が適応され、中国大陸とは異なる政治制度・社会制度が実施されますが、香港政府トップの行政長官と立法会(議会)議員の選挙は、いずれも代表制の低い間接・制限選挙となっていました。こうした選挙制度をより民主的なものに改革していこうというのが、香港の民主化運動でした。

2014年8月、中国政府はようやく香港の行政長官選挙を普通選挙で実施することを許可したものの、それは親中派の候補者しか立候補できない仕組みになっていました。この決定に失望と怒りを覚えた多くの市民が香港政府・中国政府に対して抗議の声を上げ、特に若者を中心とするデモ隊は79日間にわたり香港の中心街の道路を占拠しま

した。この運動は「雨傘運動」(警察の催涙弾・催涙スプレーを雨傘で防ごうとしたことに由来)として世界に知られるようになり、多くの香港人の政治的意識を高めたことは間違いありませんが、実際的な政治成果を上げられないまま収束してしまいました。

香港国家安全維持法の成立

雨傘運動以降、民主化運動は低迷していましたが、2019年に香港政府が「逃亡犯条例」改正案を立法会で審議・可決しようとしたことが契機となり、事態が大きく動きます。この条例改正案は、端的に言えば、中国の法律に違反している容疑をかけられた人の身柄を、香港政府が中国政府に引き渡すことができるようになる内容でした。もしこの改正案が可決されてしまえば、香港はもはや安全な街ではなくなってしまうという危機感を強めた民主派の政治家・市民たちが改正案反対の声を上げ、その抗議の輪が徐々に広まり、ついには同年6月9日には100万人、6月16日には200万人と言われる規模のデモにまで発展しました。

しかし香港政府・警察は催涙弾やゴム弾を大量に使用して取り締まり、多くの人々が逮捕されたり負傷したりしました。その後、香港政府は条例改正案を撤回しましたが、しかし若者を中心とする市民の政府への抗議活動は収まらず、香港中文大学や香港理工大学などでは警察と学生が対峙し、戦場のような衝突にまで発展しました。暗澹たる将来を悲観して、自殺する若者が何人もいました。緊迫した状況の中で、心理的・精神的に不安定になり、PTSDになった人も少なくありません。

2020年になると、新型コロナウイルス感染拡大により大規模デモが不可能になり、さらに追い打ちをかけるようにして同年6月末に、「国安法」が可決・施行されてしまいました。「国家政権転覆」「国家分裂」「テロ活動」「外国勢力との結託」が罪に問われる内容の法律ですが、基準が

曖昧であるため、実際には当局が恣意的に取り締まりをすることが可能となるものです。同法施行後、有力な民主活動家の中には、海外亡命を余儀なくされた人もいます。また多くの民主派の議員・活動家が逮捕・起訴され、そのうち何人かは既に有罪判決を受け、現在収監されています。廃刊に追い込まれた「リング日報」の創業者・黎智英（ジミー・ライ、カトリック信者！）も、昨年末に既に逮捕されており、現在収監中です。

国安法により、言論の自由・報道の自由が大きく失われ、香港の民主化運動はほぼ抑え込まれてしまった状況にあります。

香港のキリスト教が直面する課題

香港のキリスト教人口はプロテスタントが約50万人、カトリックが約40万人で、全人口約740万人に占める割合は約12%ほどですが、かつてイギリス植民地政府が教育・福祉事業をキリスト教会やその他の民間団体に多く委託したという背景もあり、香港のキリスト教の社会的影響力は、日本とは比べ物にならないくらい大きいものです。中国大陸ではキリスト教やその他の宗教に対する厳しい管理・統制がなされていますが、香港は1997年に中国に返還された後も「香港基本法」で従来の自由な制度が認められていたため（いわゆる「一国二制度」）、キリスト教をはじめ諸宗教の「信教の自由」も保障されてきました。

しかし、今回の国安法の施行により、言論・出版・集会・報道などの自由が大きく脅かされている中であって、信教の自由だけが、果たして安全地帯であり続けられるかが問題です。牧師や神父が説教や祈りの言葉の中で、国安法に触れるようなことは言わないようにと言葉を慎重に選ぶようになったと言われており、キリスト教界も圧力を感じていることは間違いありません。短期的に見た場合、キリスト教関係者であるということだけで逮捕・起訴されたり、教会の集会が取り締まられるというようなことは起こらないでしょう。しかし、長期的に見た場合、中国大陸と似たような上からの厳しい管理・統制がなされることも懸念されます。

キリスト教界で国安法の影響を最も速くそして

大きく受けるのは、むしろ教会が運営する学校機関です。というのも、香港のキリスト教系の学校の多くは、政府から土地・建物・補助金を提供されつつ教会が運営するという半官半民的な公立学校であり、カリキュラムも教育局の指導を受けなければならないからです。97年の香港返還以来、既にキリスト教学校でも国旗・国歌が義務づけられていましたが、最近では中国政府の歴史観を反映した歴史教科書の採択など「愛国主義教育」の導入・浸透の動きが見られます。これまで重視されてきた自由・民主主義といった普遍的価値は、「西洋的なもので中国の国情に合わない」として退けられ、中国共産党政権の価値観を植え付ける中国式愛国主義教育がキリスト教学校でも義務付けられかねません。まるで戦時中の日本の状況かのように。

私たちにできること……

このような香港のキリスト教のために、私たちに何ができるのでしょうか。「外国勢力との結託」も取り締まり対象となり得る現在、そしてコロナ禍の状況では、できることは非常に限られますし、また慎重にしなければなりません。

それでも、少なくとも香港の状況を「祈ること」と「知ること」はできます。状況の推移を見守りつつ、コロナ収束後に何ができるのかを、今は祈りと知識を深めながら待つ時ともいえるでしょう。

※祈りと学びの手引きとして、拙編訳著『香港の民主化運動と信教の自由』（教文館、2021年）、共著『増補改訂版はじめての中国キリスト教史』（かんよう出版、2021年）をご活用いただければ幸いです。（割引販売受付中：<https://bit.ly/3ywZ6zz>）



画家・富山妙子と韓国民主化運動

■ 真鍋祐子（東京大学東洋文化研究所教授）

さる6月10日、韓国民主化の道標となった1987年6月抗争を記念する34周年式典において、民主化の功労者29名に対する国民勲章・褒章の授与式が行われた。そのうち3名が外国人で、1921年生まれの画家・富山妙子は、韓国民主化運動を支援した日本キリスト教協議会の故中嶋正昭牧師とともに韓国政府より国民褒章を授与された。富山に対する褒章授与を推進した民主化運動記念事業会は、その功績について次のように紹介している。

「韓国民主化運動、および韓国民衆との連帯を志向する作品活動および市民活動を展開し、韓国民主化運動を日本および世界に周知させ、支持と連帯の場を押し広げ、韓国の民主主義の発展に寄与した。」

富山妙子という日本人画家は、韓国では長らく知る人ぞ知る存在だった。父の転勤で少女時代を満洲ですごした富山は、女学校で親しかった朝鮮人の旧友を訪ね、1970年に初めて韓国に渡った。その後、「学園浸透スパイ団事件」を捏造され、西大門刑務所に投獄されていた徐勝・俊植兄弟や、死刑判決を受けたカトリックの詩人・金芝河の救命運動にかかわり、73年までにさらに2度訪韓している。だが金芝河の詩に寄せた詩画集『深夜』（土曜美術社、1976）

を出版したり、自身のリトグラフ作品をカラージュシ、編集したスライド「しばられた手の祈り」（1977）を発表するなどの活動により、1978年以降、韓国入国を拒否されてしまう（日本人のノービザ訪韓が認められた1993年まで）*。それでも彼女は韓国民主化運動や日本の戦争責任をテーマとした作品を描き続けたが、画家の存在自体がタブー視された状況で、その名が周知されるべくもなかった。

光州抗争からわずか3週間で完成させたリトグラフをもとに、スライド「倒れた者への祈祷」（1980）が制作され、国内外で上映会が行われた。1982年にフランスとドイツで巡回展が催された際に、韓国人留学生の誰かが、案内チラシをひそかに持ち帰ったことで、富山の光州版画が韓国にもたらされることになったという。また、そのうち「光州のピエタ」はドイツに送られ、これを用いて作られた1981年のカレンダーが、ひそかに光州にも送られたという。そうした経緯から、富山の光州版画は1980年代以降の民主化運動で、誰もがどこかで一度は目にしたはずだが、それは韓国人画家の誰かが描いたものと考えられてきた。一方、富山の著書『解放の美学』（未来社、1979）は海賊版でよく読まれたというが、これはあくまで民衆美術家



「西大門刑務所 面会を待つ母」（1970～73年、ドローイング「富山妙子 1970 - 73」のうち、民主化運動記念事業会所蔵）。

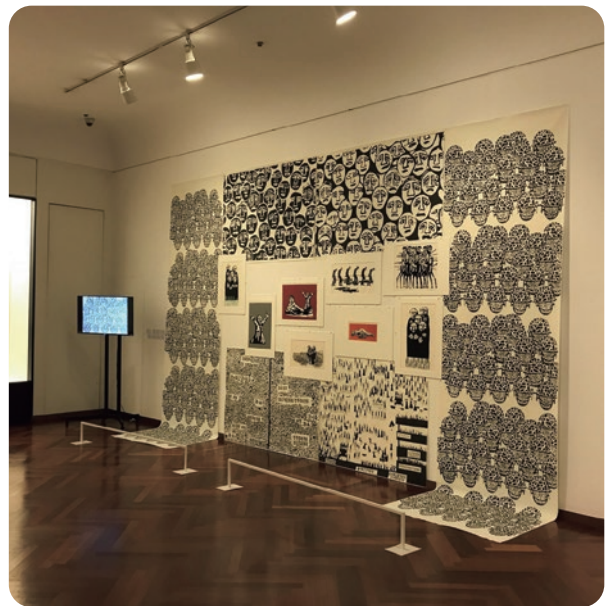


「光州のピエタ」を使った1981年カレンダーと富山妙子さん（写真左、撮影：岡村淳）。

たちの地下化したインナーサークルでの話である。

解放・光復50周年にあたる1995年、富山は第一回光州ビエンナーレに招待され、夏にはソウルの東亜ギャラリーにおいて韓国で初めての個展を開いた。また2003年には盧武鉉政府より海外民主人士として表彰されている。以来20年近くたってから、このたびの叙勲に至ったのには、実は韓国映画「タクシー運転手」(監督：張勳、2017年公開)によるところが大きい。光州の真相を世界に伝え、民主化支援の連帯へと世界の人々を促した情報の媒介者として、惨劇を収めたフィルムを命がけで持ち出したドイツ人記者の存在に光があてられると同時に、情報の中継点として「東京」の役割が見直されるようになったのである。2018年、光州市が運営する5・18民主化運動記録館が、1970～80年代の日韓連帯運動や、在日朝鮮人による韓国民主化運動に焦点をあてた研究企画を立ち上げる。当然、富山が韓国民主化にはたした役割にも改めて光があてられた。

筆者が富山の知遇を得たのは2010年のこと。当時すでに90歳を目前にしていた富山は画家引退を決めており、筆者は膨大な蔵書や資料をどうすればよいか相談を受けるようになった。しかし東日本大震災と続く原発事故によって、富山は再び絵筆を握ることにした。一方、蔵書や資料の整理と寄贈は筆者の研究室で引き受けることとし、2017年度から日本学術振興会・科学研究費補助金を受け、富山の画家人生と作品世界の越境性に着目した共同研究をスタートさせた。最終年度となる2020年度、延世大学博物館と共催する予定だった富山の回顧展「記憶の海へ—富山妙子の世界」が、コロナ禍による延長の末、3月12日に開幕した(8月31日まで)。本展企画を一手に担った尹賢鎮^{ユンヒョソン}学芸員は、富山作品を世界に遍在する不義と野蛮の証言者と意味づけ、「戦争の記憶」「地の底の人びとの記憶」「詩人のための記憶」「光州の記憶」「フクシマの記憶」という5つのテーマで展示を構成した。



2020年延世大学博物館 富山妙子回顧展「記憶の海へ—富山妙子の世界」会場写真(撮影：稲葉真以)。

事実、富山の画家人生の原点は満州で目撃した中国人や朝鮮人の受難と、日本人の傲慢に対する憎しみだった。それは植民地主義への憎しみと言い換えてもいい。富山の功績は光州の悲劇を描くにとどまらず、その背後に日米韓同盟という名目で形を変えて連続する植民地主義を見抜くその理念的洞察にある。現今のミャンマー情勢、また緊急事態宣言下での東京オリンピック強行という事態に照らしてみても、富山作品は今なおアクチュアルな問いを私たちに投げかけているといえるだろう。

事務局注*当時まだ創設されたばかりだった日本カトリック正義と平和協議会が、初めて取り組んだのは、韓国のカトリック詩人金芝河の死刑宣告(1974年)など、韓国における一連の人権侵害事件でした。この事件を通じ、この時期、日本カトリック正義と平和協議会は富山妙子さんと活動を共にしました。

「心配はいらない。私はあなたと共にいる」

■ 中井 淳 (下関労働教育センター)

社会教説小教区行脚 2 年目のテーマは「出向いていこう」。種本はもちろん使徒的勧告『福音の喜び』(2013年発表)と、その背景を克明に語ってくれているオースティン・アイヴァリー著『教皇フランシスコ キリストとともに燃えて』(2016年2月、明石書店)である。東京に出張したおりに劇場で見た映画『ローマ法王になる日まで』(2015年公開、監督：ダニエル・ルケッティ)も背中を押してくれた。

2013年に教皇に選ばれて最初に出された使徒的勧告『福音の喜び』は、フランシスコがこの時代に神が教会に求める姿とそのロードマップを示したものである。その核心は49にある。「出向いて行きましょう。すべての人にイエスのいのちを差し出すために出向いて行きましょう。わたしは、出て行ったことで事故に遭い、傷を負い、汚れた教会の方が好きです。閉じこもり、自分の安全地帯にしがみつく気楽さゆえに病んだ教会よりも好きです」コンクラーベ(教皇を選ぶための枢機卿たちの集まり)を前にした演説で、ホルヘ・ベルゴリオはこのビジョンを示し、多くの枢機卿に「今教会に求められているのはこのメッセージだ」と頷かせた。イエスが戸口に立って呼びかけるヨハネの黙示録の一節は、彼にとっては、イエスが部屋の中に閉じ込められてしまっているというものである。「私を外に出してほしい」と内側から扉を叩いている。教会は、イエスという喜びの源をその扉を開けて外に出向き、わかちあっていかなければならない。

傷つく人々に関わっていくならば私たち自身が傷ついていくことを避けることはできない。しかし、ポロボロになり汚れてしまった私たちを神はよしとしてくださり、温かい眼差しで見つめてくださっている。思い起こされる私自身の記憶がある。問題の渦中にある人に関わり、解決へと導くことができず、失敗に思えるような経験を抱えて黙想に行ったときに、『福音の喜び』のメッセージ

がどれだけ励ましてくれただろう。傷を負い汚れてしまった自分を温かく見つめる神のまなざしのうちに身を置くことで少しずつ希望の光が差し込んできたのだった。「さあ、沖へ漕ぎ出そう」。

心の扉を開き、人々の顔と名前を心でいっばいにしていくこと。私たちが出ていく先で待っている人たちがいる。呼びかけを信頼して踏み出すならば、目に見えなかった、向こう岸へ渡る橋がそこに確かに現れてくる。

「果たして行けるだろうか」。踏み出すときに、私たちの心には同時に恐れも生じるものである。しかし、使命への恐れはよき霊からのしるしであることをフランシスコは身をもって体験してきた。

ぜひ『キリストとともに燃えて』を読んでほしい。そこには、教皇として選ばれサン・ピエトロ聖堂のバルコニーに現れ、私たちに祈りを願ったあの謙遜なフランシスコの微笑みの理由が語られている。まるで大きな荷物を担っているかのようにシステーナ礼拝堂を横切っていく彼は、途上にある聖堂でしばし祈った。そこから出てきた彼は全く別人のように、微笑んでいた。彼は後に語っている。「私は大いなる光で満たされた。それはほんの一瞬のことだったが、私にはとても長く感じられた」

社会の痛みの湖へと漕ぎ出すならば、恐れと不安の中にあっても、私たちはフランシスコ教皇が道の途上で聴いた声を感じるだろう。そして、それはフランシスコが大切にしてきた信心「マリアの外套の中に入る」というあり方と共なるものであることを強調したい。私たちの力に頼るのではなくひとえに神の働きに頼る道。それは、「神の聖なる母の外套の下に入り、十字架の記憶と復活の希望の間で聖なる緊張の中を生きていく」こと。その中であって私たちを祝福が包み、魂に触れてくる声があるのだろう。「心配はいらない。私はあなたと共にいる」。



「ひとは過つ」^{あやま} ～竹山広への手紙～

■ 大口玲子 (歌人)

・この川の水に重なりたる死者一日おもひ一年忘る 竹山広『千日千夜』1999

竹山さんが生きていたら「季節の挨拶のように8月だから原爆を話題にするのか」と嘆かれたかもしれません。「一日おもひ一年忘る」は、忘れっぽいその他大勢の人たちを皮肉っているわけではなく、二十五歳の時に長崎の爆心地から1.4kmの病院で被爆したほかならぬ竹山さん御自身だという痛切な告白を、あらためて重く受けとめています。逃げる途中に見たおびただしい死者の姿を振り払うように忘れないと、辛くて生きていけなかったこと、そしてその時の死者が夢に出てくることに脅かされながら、被爆の体験を短歌に詠み始めたこと。「一年忘る」と詠んでも、実際に記憶から自由になれる日はどれだけあつたらうかと2010年に亡くなられた竹山さんの戦後を思うのです。

・さし伸ふる宰相の手をふし拜む老被爆者をいつまで写すか 竹山広『葉桜の丘』1986

・撮られむとひとは微笑す原子爆弾落下中心塔をかたへに 同

人前でいいところを見せようとする権力者の態度と、ここぞとばかりに張り切るカメラマン。そして爆心地を訪れた観光客が一瞬見せたカメラ目線の微笑。「いつまで写すか」の部分を読む時、温厚だった竹山さんの怒声が聞こえるような気がしてなりません。また観光客の「微笑」を見逃さない竹山さんの鋭さは、日常ではなかなか言葉にしがたい人間の闇の部分の怖いくらいに明らかにしていると感じます。

・四十年目四十年目とひとらふ原爆の日を待つものごと 竹山広『葉桜の丘』1986

・あとはなきごとく五十年五十年と言ひ合ひたりし声も終りき 竹山広『千日千夜』1999

被爆と敗戦からの節目の年を、やや醒めた視点から、しかし繰り返し詠んでいた竹山さんが

「あとはなきごとく」と書いたように、被爆や敗戦に思いを寄せる声は少しずつ小さくなっているようです。昨年からは新型コロナウイルスの影響もあり、式典などの規模も縮小されています。「原爆の日を待つものごと」というのは恐ろしい比喻ですが、今になってみればそんな盛り上がりも大切だったのではないかと考えたりもします。76年目となる今年の夏は東京オリンピックが予定されており、開催された場合の閉会式は8月8日、長崎の原爆の日の前日です。IOCの会長が被爆地を訪問するというニュースもあり、竹山さんだったら今の日本をどう詠まれるか、ぜひ聞いてみたいです。

・司教様も人間なれば旨きものを好みたまひて肥満体となる 竹山広『一脚の椅子』1995

・八倍の抗癌剤を投与せし医師ありきげにひとは過つ^{あやま} 竹山広『週年』2004

・わが知るは原子爆弾一発のみ一小都市に來しほろびのみ 同

・アーメンとは然^{しか}あれかしといふ意にて核を蓄ふる人らも唱ふ 同

カトリック信者である竹山さんが徹底して見詰め、表現してきたのは、神の前に限界のある存在として生きる人間の姿でした。「人間なれば」「ひとは過つ」という表現には、個人への批判や皮肉というよりも、「人間」である誰もが本質的に持っている弱さと限界が示されているのではないのでしょうか。「わが知るは……」の歌では、繰り返される「のみ」という限定の言葉に、被爆という壮絶な体験をここまで客観視できるのかと驚きます。最後の一首、竹山さんは原爆を落とした国を意識したのですが、「核を蓄ふる人ら」には、今や数多くの原発を抱え持つ日本人も含まれています。私もまた「アーメン」と唱えつつ、「核を蓄ふる」国に生きているのです。



- 1 特集 東アジアの人権問題
いのちの鍋叩き～ミャンマーキリスト者たちの確信を受けて
..... 渡邊さゆり
- 4 ミャンマーのカトリック教会 レオ・シューマカー
- 5 世界の関心がミャンマーを変える! 西 千津
- 6 香港国家安全維持法下におけるキリスト教 松谷暉介
- 8 画家・富山妙子と韓国民民主化運動 真鍋祐子
- 10 (連載第2回)
カトリック社会教説 一步一步
「心配はいらない。私はあなたと共にいる」 中井 淳
- 11 (連載第12回)シロツメクサの花かんむり
「ひととは過つ」～竹山広への手紙～ 大口玲子
- 12 苦虫のつぶやき フィリパ・クエバス
まんが新連載「神学生トマス」

第41回日本カトリック正義と平和全国集会 2021大阪大会「すべてのいのちを守る」が、2021年11月22日(月)、23日(火・休)完全オンライン形式で開催されます。詳細は、大阪大会事務局までお問い合わせください。
☎06-6942-1784 Eメール jptaikai@osaka.catholic.jp

表紙写真 月に一度、カトリック築地教会(東京教区)で開かれる在留ミャンマー人のためのミサの様子(2021年6月27日撮影)

苦虫のつぶやき

日本の暮らしに根を下ろすこと

私は神学生のときに、日本で神学を勉強するためにメキシコから派遣され、東京の上石神井にある東京カトリック神学院で勉強を続けました。神学校生活では、日本語の壁が厚く感じられ、その中でも特に「みんな」という集団的な意味を持つ言葉に苦しめられました。「みんながそう言っている」「みんながそう考えている」「日本人はみんな刺身が大好きです」などなど。

「みんな」という言葉を聞けば聞くほど思うのは「みんな」って誰? 「みんな」という言葉には顔がありません。名前もありません。この言葉の意味は「全員」ではありません。なぜなら「全員」がそう言っているわけではないし、「全員」がそう考えているわけでもないし、日本人「全員」が刺身が大好きなわけではありません。「みんな」の使い方に、「どうも」の使い方と同じくらい苦しみました。

今は「みんな」という表現は、「千本の桜」に似ていると思っています。「千本の桜」は、文字通りの意味を示しているわけではなく、この言葉が浮かびあがらせるイメージを示しているのです。「みんな」という表現は、使い分けによって「全員」を示すこともあれば、あるグループを示すこともあるし、帰属意識を高めたくて使われる表現でもあると思います。

集団意識の強い日本の社会では「みんな」の使い分けには注意を払うべきです。なぜならパワーを示す表現でもあるからです。「みんなが決めたことです」と言われたら言い返すことができないですね。だからこそ、場合によってはちょっと時間をとって、「みんなって誰?」と問いかけてみる必要があると思います。

フェリパ・クエバス(日本カトリック正義と平和協議会委員、グアダルベ宣教会)

編集後記

東アジアの人権問題、残念ながらとりあげることができなかったが、ほんとうなら取り上げなくてはならなかったのは、まちがいない日本についてだった。

このところのコロナ感染者数は増加の一方だ。東京は4回目の緊急事態宣言下にある。自殺者の増加も報告され、先月は全国で1745人に上った。7月3日に起こった熱海市の土砂災害は、18人の死亡が確認され、10人以上の方の行方がいまだ不明だ。福島原発事故避難者は住宅無償提供支援が打ち切れ、住居を追われている。

オリンピックどころではない、という悲鳴が日本中のあちこちから聞こえる。東京・江東区にある正義と平和協議会事務局からほど近くに、選手村の高いビルが建っている。オリンピックに政府が注いだあの莫大な資材は、別のものに使われるべきだった。国は何を優先し、何を諦めるべきだったのか。その優先順位の誤ち。これは人権問題ではないのか。(h.)



発行日 2021年8月1日(隔月発行)
編集発行 日本カトリック正義と平和協議会
〒135-8585 東京都江東区潮見2-10-10
TEL.03-5632-4444 FAX.03-5632-7920
E-mail jccjp@cbcj.catholic.jp

購読料 年 1,800円(送料共)
郵便振替 00190-8-100347
加入者名 カトリック正義と平和協議会

<http://www.jccjp.org>